

医学雑誌編集委員会の活動

勝 部 琢 治

キーワード：専門医・指導医の取得・更新；研究活動；査読制度

(雲南市立病院医学雑誌 2019; 16(1): 159-160)

はじめに

平成27年に、大谷順院長（当時）の提言により、今後、新たな専門医制度が始まることにより、専門医や指導医の取得や更新をするために論文の発表が必要なこと、また、看護研究などの学術的発表の場やquality control (QC) 活動の記録を掲載する場が必要ということで、12巻（2006年）までで活動が途絶えていた医学雑誌編集委員会を立ち上げることになった。

活動の経緯

編集委員会を軌道に乗せる準備として、2016年2月に委員会を開催し、委員会の要綱や投稿規程などを協議し、その後委員長を選出し、2016年度より本格的に活動を再開する基礎を形成した。

2016年に入ると本格的に委員会活動を開始した。10年前に発行して依頼、医学雑誌を発刊しておらず、当時、脳神経外科安藤誠一先生が中心となって編集、発行していた医学雑誌の発刊はどのようにしていたのか、投稿規程はどうなっていたか、誰もわからず、手探りの状況ではじまった。編集委員会内で相談しながら、投稿規程の策定、院内周知、査読のルール化など、ひとつひとつ新たに決まりを作っていた。

当時、原稿が十分に集まるかどうかが一番心配だった。しかし、多くの職員の協力により、最終的には10

編を超える論文が集まり、当院として10年ぶりに医学雑誌を発刊することができた。本当に感謝の気持ちと安堵感を感じることができた。

特に、病院経営がうまくいかなかった10年間は、当院の職員間で「研究」という分野はあまり活発的に活動をしてこなかったように思う。しかし、森脇義弘委員長と若手医師を中心に、委員会として「研究」の必要性を職員に広め、少しずつではあるが活動の輪が広がり、投稿数も減ることなく続いている（図1）。

今後の展望

今後の課題としては、査読の迅速化及び編纂作業の効率化が上げられる。投稿数が多くなったのは良いが、期限内の査読などができず、事務的な煩雑さを生み、毎年仕上げる編纂作業に支障が出てきている。これからは、システムチックに進むように事務局も努力していく必要がある。

まとめ

最後に、医療職として、探究心と仕事をひとつずつまとめることが医療レベルの向上に繋がると信じている。この医学雑誌をひとつのきっかけに、当院のアカデミックな活動の一助となり、臨床・教育・研究を含めて総合力の向上につながるよう活動を継続したい。

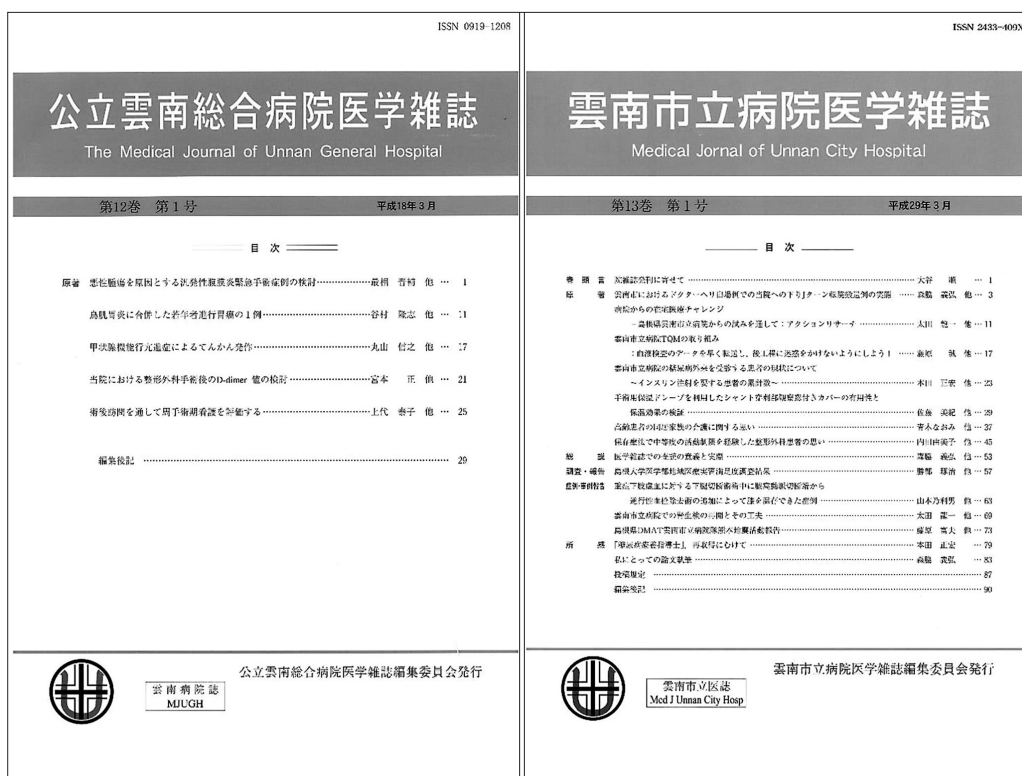


図1 中断直前の12巻1号（2006年刊行）と再開第1号の13巻1号（2016年刊行）

Activities of the editorial committee of the medical journal of Unnan City Hospital.

Takuji Katsube

Editorial committee of the medical journal of Unnan City Hospital, General affairs division, Unnan City Hospital
 Correspondence: Takuji Katsube, General affairs division, Unnan City Hospital [96-1 Daito-cho Iida, Unnan, Shimane 699-1221, JAPAN]
 Telephone: 0854-47-7500 / Fax: 0854-47-7501
 E-mail: hospital-kikakuz@city.unnan.shimane.jp